

陳舜臣さんを語る会通信

NO.62

Mar. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年3月20日

陳舜臣小説の最長編でミリオンセラー『小説十八史略』

最初、『サンデー毎日』に連載された『小説十八史略』は、単行本として毎日新聞社から、1977年に1巻と2巻、78年に3巻と4巻、82年に5巻、83年に6巻が刊行されました。その後、毎日新聞社から新書版十二巻の普及版が出たり、講談社の全集に入ったり、同じく講談社から文庫版が出たり、いろんな形で出版されました。対談で、聞き手の、「いろんな形式のものをトータルすると百万部以上になるんじゃないですか」との問いに、陳さんは、「それくらいにはなるでしょうね。毎日新聞社は、たくさん売らせてもらい、ありがとうございましたと、大きな革張りの記念本を特別に作ってくれましてね」（集英社『陳舜臣中国ライブラリー10』「自作の周辺」）と答えています。（編集委員 橘雄三）



講談社文庫六巻本
表紙

『十八史略』とは？
講談社『陳舜臣全集第三巻』
稲畑耕一郎「解説」より抜粋引用

『十八史略』は、宋末元初の人、曾先之^{そうせんし}の著である。字は孟参、江西省吉水の人。
『十八史略』は、書名に示されるごとく、歴代の十八種の史書を抄略して作られた書物である。
原拠となった史書とは、『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『晋書』『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』『魏書』『北齊書』『周書』『隋書』『南史』『北史』『新唐書』『新五代史』『続資治通鑑長編』（また『続宋編年資治通鑑』）の十八種であるとされてきた。しかし、近年の研究によれば、秦から五代までの記事は、大部分が、北宋の司馬光の『資治通鑑』の引き写しか、その節略であることが明らかにされている。また、宋代の部分には、『続資治通鑑長編』や『続宋編年資治通鑑』では扱われていない後の時期まで書かれているので、別に拠るところがあったと指摘されている。

初出は『サンデー毎日』
集英社『陳舜臣中国ライブラリー10』
「自作の周辺」より

稲畑耕一郎 『小説十八史略』は『サンデー毎日』に連載されたものでしたね。一九七四年一月六日号から七七年の六月十二日号まで。
陳舜臣 たしか、そこでいったん中断したんです。ちよつと長すぎたんです。しんどくなつてね。ほかのものを書く都合もあつたし。向こうは、ずっと続けてくれというんですけれど、休ませてもらいました。
稲畑 その時は、どの辺まで書いたんですか。
陳 隋の文帝の時代までだったかな。しかし、やはり元のところまで書かないと看板に偽りありということになりますからね。で、四年ほどして、再開したんです。まず途中までを四巻の単行本にして、再開後が二冊。で、合わせて六巻本ということなんです。休んでいる間に、読者から「何で、あそこで終っているんだ」という投書がたくさん来たらしいんです。

講演旅行中に執筆した思い出
集英社『陳舜臣中国ライブラリー12』
「自作の周辺」より

稲畑 陳さんがこれまで書いてきた作品の量は、原稿用紙にして何枚ぐらになるんでしょうかね。すごい量でしょう。
陳 アハハッ。そんなの、わかりませんよ。だいたい作品の数だつて、自分で何本になるか知らないんですから。..
稲畑 この『小説十八史略』だけでも今回（陳舜臣中国ライブラリー）の組みですと、単行本三冊分でしょう。しかも、この本は、二段組みですからね。一ページ四百字詰め二枚半近くとして。やめましょう、こんなのを計算しても意味がない。
陳 私はだいたい締め切りに遅れたことはないんですけれど、『サンデー毎日』にずっとこれを連載していて、一回だけ計算間違えをしたことがあるんです。自分ではたくさん書いて、まだ何週分かゆとりがあるだろうと、講演旅行に出かけたんです。そして、編集部から、もうストックはゼロ、今週入稿分ありませんと催促がきましてね。旅先で書く破目になりました。永井路子さんに「陳さん、こんなところまできて、まだ書くの？」と言われて、恥ずかしい思いをしました。（傍線は編集委員の加筆）

『小説十八史略』各巻・章・節 一覧 (1) (講談社文庫版による)

巻	時代	章	節(連載の一回分)
1	殷紂王 → 始皇帝	1	日を射る者 酒池肉林 天道は是か非か 竜の唾から 怪腕自滅 春秋の友情 覇者をつくる男たち
		2	復讐は我がいのち 兄弟逃亡 怨念は消えず あざやかな恩讐 怨霊さまざま 逃亡者 王位転々 日暮れて道遠し 囚人部隊は行く 臥薪嘗胆 呉宮の蝶 恩讐の道 春秋の終幕
		3	兵法の名門に生まれて いざり軍師 いまや宰相 百家争鳴の裏方 危険な綱渡り 鶏鳴狗盗
		4	人呼んで鬼谷先生 謀略学校 身は裂けても 汨羅に沈む 同門の弟子 追放令くだる 孤独な少年王 巨根の長信侯 骨肉の争い
		5	二重脱走 詭策あるのみ 易水の歌 事は成らず 老將軍再登場 天下は一つ 復讐謀議 空とぶ鉄椎 博浪沙始末 太公兵書
2	始皇帝の死 → 漢武帝の親政	6	亡命の日々 巨星墜つ 陰謀 鴻鵠の志 陳勝呉広 真贋 分裂 郡でも県でも 天下は混沌
		7	兵力問答 戦雲暗し 両雄出陣 西への道 揺れる咸陽 吉祥の地 鴻門へ 咸陽燃ゆ 天下再び乱る
		8	楚漢第一戦 大軍師退場 項羽東奔西走す 終盤戦を迎えて 山抜く力 烏江に散りぬ 黄金のとき絶頂のひと 韓信転落す
		9	匈奴の擡頭 無理をするまいぞ 功臣滅ぶ 大風起こりて 皇帝病む 後宮残酷物語 女君専権 たそがれ 呂氏滅亡
		10	再び劉氏の時代 呉楚七国の乱 愛憎はげし 女の争い 女の罣 武帝登場の前夜 少年皇帝の雌伏 皇后敗退す 奴隷から將軍へ 新風
3	武帝のたそがれ → 三国時代幕あけ	11	老将は消えず 石に立つ矢 なんとる不運! 憎しみの炎 傾国の佳人 弑師將軍が行く 生き恥さらして 異域に生きる
		12	武帝のたそがれ 哀情多し 霍光体制安泰 廃帝始末 皇后謀殺事件 庶民から皇帝への道 おん身ひとりを 平和の時代 王昭君考
		13	王莽世に出る みだれた後宮 いつもの手 皇帝の座は近い 漢ついに滅亡す さらば緑林 眉赤き造反軍 緑か赤か 天下混戦
		14	皇帝だらけ 妻をめとらば 日本登場 虎穴めざして 幼帝また幼帝 後門の狼 皇帝商売繁昌 黄巾軍起つ 黄巾軍は死なず
		15	花の八人衆 皇帝が死ねば みな殺し 野性の手品 情け無用 運命なり流れ矢 董卓の最期 呂布が行く 寝首は誰が搔く 復讐の鬼
4	三国時代 → 隋の統一	16	仲間割れ 天子は東へ 建安の幕あけ 皇帝になろう 徐州攻防 二つの敗走 呂布舞台を去る 見果てぬ夢
		17	天下分け目の戦い 興亡 三顧の礼 南征軍きたる 逃げよ劉備 決断のとき ああ赤壁 赤壁以後 乗っ取り物語
		18	英雄たちの退場 劉備も去る 泣いて馬謖を斬る 天下三帝 丞相病む 五丈原に秋更けて
		19	孔明亡きあと 洛陽に異変あり 仲達雌伏 司馬一族決起 おぼつかない統一 大乱序曲 美少年狩り 天下斜陽 流転の皇后 弱い亡命王朝 後趙興亡 ふしぎな大敗 南は南で 帰りにないざ 暴君狂主 北の覇者 文明への道 長命皇帝登場 王朝分裂 文武の道尽きぬ 亡国の譜 大統一

『小説十八史略』補足(1) 徐福

じよふく

徐福は秦の始皇帝の命で、東海の三神山に不死の仙薬を求めたという伝説上の人物。

5章「太公兵書」6章「亡命の日々」ほかで登場します。

徐福村は江蘇省連雲港市郊外にあります。写真はロータリーに立つ徐福像(編集委員撮影)。友人の話だと、現在、この像は徐福村に移されているとのこと。



補足(2) 妻をめとらば陰麗華

14章「妻をめとらば」に登場する陰麗華。陳さんご執心の女性で、『妖のある話』でも取り上げています。

後の光武帝には、若かりしころ、夢がありました。「仕官するなら執金吾、妻をめとらば陰麗華……」。

後、二人は、皇帝と皇后になります。中国ドラマ

『秀麗伝』の主人公。演じるは、ルビー・リン。



『小説十八史略』各巻・章・節 一覧 (2) (講談社文庫版による)

巻	時代	章	節(連載の一回分)
5	唐の成立 玄宗まで	21	天下大乱 桃李の子 次男坊 いざ、長安へ われ長安に達す 吳公台下に悲風多し 緑影、一千三百里 野望は山中に消えた またもや皇帝
		22	黄河の東 砂塵作戦 濁流きたる 骨肉の暗闘 玄武門の凱歌 貞観のはじまり 仏法再興 高昌国滅亡 栄光の帰還
		23	遠征より帰る 太宗、世を去る 貞観の遺産 美女還俗 抵抗する者なし 東方の戦雲 血戦白村江 新しい人材 太子たちの悲劇 浄光天女即位 女帝晩年 唐王朝復興
		24	颯爽たり李隆基 二つの譲位 太平公主没落 暮れ行く開元 十六宅の女 春寒くして浴を賜う 寵妃権臣 昇進の道 海を渡る人たち
		25	長安往還 安祿山謀反 両將軍斬刑 玄宗、長安を去る 六軍発せず 騒乱九年
6	唐滅亡 南宋滅亡	26	失われた首 中興の影 甘露の変 騒乱しきり 諸州陥落 衝天大將軍 賊を消すな 黄巢、皇帝となる 流血の狂気 力だけの時代
		27	宦官全滅 享国二百九十年 五代の興亡 統一の気運 軍は京師へ 望遠行 澄心堂の国主 千載不決の疑
		28	太宗の世 開封繁昌記 澶淵の盟 父と子 西夏帝国 曲がり角 新法はじまる 鍾山に死す 青山一髪 新法の墮落 海東の青 南の反乱
		29	燕京は誰のもの 背信の報い 再び黄河を渡る 亡国の曲 楚の崩壊、宋の南遷 和戦両道 秦檜、北より帰る 精忠岳飛 和議顛末 海陵王狂乱 和約と破約
		30	チンギス汗誕生 草原の嵐 モンゴル、西征より帰る 盟友から敵へ 伏せられた講和 凱旋宰相 蒙古来たる 元軍、長江を渡る 文天祥起つ 崩れゆく山河 厓山に滅ぶ



馬嵬の道路脇にある楊貴妃墓
編集委員撮影

補足(3) 楊貴妃の最期
『小説十八史略』25章「六軍発せず」より

「おまえしはいない」と、玄宗は言った。
「かしこまりました」
高力士は身を起こして立ちあがった。
高力士は玄宗のいないところで楊貴妃を殺した。
馬嵬の宿場のなかに、小さな仏堂があり、高力士はそこへ楊貴妃を連れ出したのである。
楊貴妃はそのとき、すでに自分の運命を悟っていた。
「お命をちょうだいいたします。薬を用意いたしました」
「薬よりも……これをお願いします」
楊貴妃は淡紅色の帯を腰からはずした。高力士はそれを拾いあげて、おしいたき、
「なにごとにも前世の宿縁でございます」と、咽びながら言った。
「庭に梨の木がありますわ。……あの枝ぶりがよろしゅうございます」
楊貴妃は自分で死場所をえらんだ。

稲畑耕一郎 中国の歴史書のダイジェスト版ともいえる『十八史略』には、それこそ数え切れないほどの歴史上の人物が登場しますが、その中で陳さんが最もとも関心を寄せておられるのは誰ですか。

陳舜臣 やはり一番最後に出てくる文天祥ですね。見栄えのいい生き方をしたり、人間らしく暮らした人はたくさんいますけれど。しかし、その生きざまにおいて、あんな人になりたいと思うのは、彼をおいていない。私にはまねできませんがね。

稲畑 南宋に殉じたということですか。

陳 ええ。ただ殉じるだけで、そこから得るところは何もないということを知りながら、貫き通したんですね、あの人は。おのれが生きて、その道のみを残そうというね。

(傍線は編集委員の加筆)



江西省吉安にある文天祥紀念館
文天祥立像 編集委員撮影

補足(4) あんな人になりたい文天祥
集英社『陳舜臣中国ライブラリー』
「自作の周辺」より

『サンデー毎日』に連載『小説十八史略』

『小説十八史略』は、『サンデー毎日』に1974年1月6日号から77年6月12日号まで連載され、4年ほど休載、81年7月19日号から再開、『栄枯・十八史略』のタイトルで、83年6月12号まで連載されました。計277回(節)。

『サンデー毎日』の昭和49年9月29日号(定価130円、購入価格は800円+送料215円)を入手したので、ここに紹介します。下に引用した『小説十八史略』の頁数は講談社文庫六巻本による。(編集委員 橘雄三)

小説十八史略

「事は成らず」掲載頁

題字、赤尾兜子。田代光画。

第一巻、第5章、「事は成らず」の節です。一節が連載の一回分です。以下、挿画の箇所、本文を転載します。

クラヒア
チビッコ体操
大会・波高し
むつ湾・15年
目松尾和子・
サイタル・
飛び27億円・
志穂美悦子

連載小説
身上相談 第15回 遠藤周作 66
小説十八史略 第39回 陳舜臣 88
不毛地帯 第33回 山崎豊子 80

地に落ちた風吹ジュンの清純イメージ

20年ぶりの夢ドラゴニストたち只今「百喜自愛中」
■わが不安と憧憧！優勝したらモミサゲを切り落とそう…… 鈴木 武樹

ワインを飲まない人間はいつか裏切るロジェール・クー
（向ドキュメント）安田 潤 浮き世の転変に口笛ふ
き鳴らす元財閥御曹子

新連載小説『風の岬』第2回 渡辺淳一

58 42 118 121 133 80 88 66

同号 目次の一部

山口百恵さん(当時15歳)が初々しい。



表紙撮影 平嶋彰彦

『サンデー毎日』昭和49年9月29日号表紙

「その舞陽の持つて参った地図を見せい」と、秦王政は荊軻に言った。(中略)

荊軻は地図の巻頭のところを紐をほどいてひろげ、それを秦王のほうにむけてさし出した。そのあと、秦王は目を細めたまま、どちらかといえば気のなさそうなようすで、面倒臭そうに巻物をひろげたのである。

巻物の最後のところ、芯にあたる部分に、七首をかくしていたのだ。徐夫人の七首。一刃には猛毒が塗られている。

荊軻は右手をのばして七首を握り、左手で秦王の袖をとらえた。袖は長い。地図を献じて、できるだけそば近くに寄ったつも



りだが、それでも袖の先を掴みえたのにすぎない。右手の七首をつき出した。しかし、秦王の内懐は深かった。七首の刃は、からだに届かない。秦王政は驚き、身をひいて立ちあがった。(中略)

荊軻は七首をつかんで、秦王に迫ろうとする。(1巻 p.450-452)

もう一つの挿画の場面です。



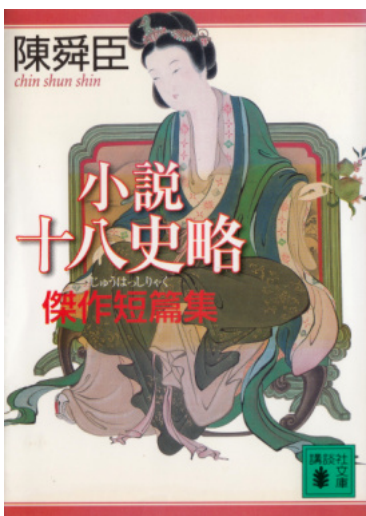
荊軻の行動には燕の太子丹の命があった。荊軻は失敗し、秦王政は怒り、燕を攻め、太子丹をどこまでも追った。太子丹は、

「私は潔く散りましょう。おなじ首を刎ねられるにしても、骨肉の身内の手にかかりたくありません。敵にあたって碎けるつもりです。さらば」

と、数十騎の側近を従えただけで、衍水にむかって行った。衍水の対岸には、秦の青年將軍李信が陣を張っていた。

(1巻 p.459)

『小説十八史略 傑作短篇集』



講談社文庫版表紙

同著は講談社文庫『小説十八史略』の姉妹篇

本書は、講談社文庫のロングセラー『小説十八史略』全六巻の、姉妹篇である。

『小説十八史略』は、いわば「史談」的小説である。いっぽう本書は、「伝奇」的な歴史小説を集めてある。

伝奇的、というのは、小説の特権である想像力が、存分に駆使されている、という意味である。史実の舞台裏についての、大胆な推理が提示されている。架空の人物も登場する。ただし、史実そのものを大きく曲げたところはないのは、さすがである。

本書は、独立した短篇集としても、面白い。ただ、もし『小説十八史略』全六巻とあわせて読めば、「史談」と「伝奇」の味わいの違いが感じられ、陳舜臣文学の面白さを、いっそう堪能することができる。（同著、加藤徹「解説」）

■『小説十八史略』は、『サンデー毎日』に連載されたあと、毎日新聞社から単行本として出版され、のち、講談社の全集に入ったり、同じく講談社から文庫版が出たりしました。

同著の内容・体裁

李隆基はのちの玄宗皇帝である。

彼はこの日のために、ひそかに才能のある、勇敢な人物を身邊に集めていた。

政府の要職にある者を近づけると、韋氏一族に怪しまれる。李隆基は文官では中堅以下の者たち、武官では各宮の青年将校たちを同志としていたのである。そのなかには、太平公主の息子の薛崇簡もいた。

李隆基のうしろには、太平公主もいたのである。

中宗の死の十八日後。

雪のように星の散り落ちる夜のことであった。

同志の一人がそれを指さして、

「見よ、星が散り落ちる。これぞ天意なり！」

と、叫んだ。

果毅都尉の職にあった青年将校の葛福順は抜剣して、羽林宮に斬りこんだ。

羽林宮とは近衛軍団のことである。韋氏一族は、新王朝樹立の布石として、まず軍部を掌握しようとした。そのため一族の者を司令官として、羽林宮に送りこんだ。韋璿、韋播といった連中である。彼らは韋皇后が権勢の座につくまでは、いたって低い官職にあつた。それが一躍、羽林の將軍となったものだから、背伸びして、自分たちの威厳を示そうとした。

羽林宮に送りこまれた韋氏一族は、示威のために、恐怖政策をとったのである。な

にかあると、すぐに鞭打ちの刑に処した。たしかに、韋氏の司令官を見る近衛兵の目には、恐怖の色がうかんでいた。

だが、恐怖はすなわち憎悪でもあつたのだ。

李隆基はそのような軍営の心情を、よく知っていたのである。

斬りこみ隊長の葛福順は、李隆基から命じられたとおり、韋璿、韋播とその一党の幹部である高崇の三人だけを斬った。

韋氏一族には、まったく備えがなかった。彼らのなかには、あまり有能な人間はいなかったのである。おべっか上手ばかりで、状況判断さえできなかったのだ。

このまえの李重俊の暴走とちがって、李隆基のクーデター準備は周到であった。各軍営に、内応の士官をもっていた。

「先帝を毒殺せしは韋氏ぞ！ 今夕、国家を危うきにおとし入れた韋氏一族一党は、すべて誅殺する！」

斬りこみと同時に、営内からそんな声が、こだまのように返った。

「馬鞭以上は斬れ！」

という声も応じた。馬鞭の長さより背の高い者、すなわち乳幼児以外の韋氏は、みな殺しにせよというのである。

——『小説十八史略』第五巻「颯爽たり李隆基」より

同著は、次の十篇からなっています。番号は加筆。

- 1 「荊軻、一片の心」
- 2 「孟嘗君の客」
- 3 「虎符を盗んで」
- 4 「季布の一諾」
- 5 「虎穴に入らずんば」
- 6 「弥勒乱入」
- 7 「背負って走れ」
- 8 「楊貴妃は覇水を見た」
- 9 「パミールを越えて」
- 10 「落日孤雲」

ところで、7（初出、『カッパマガジン』に掲載）以外、既に別の短篇集に収録されていた作品をピックアップしたものです。

1～4は『中国任侠伝』、5と6は『続・中国任侠伝』、8～10は『胡蝶の陣』です。

そして、それぞれ先ず、見開き左右二頁、『小説十八史略』から転載しています。

例えば上の段に載せた箇所を例に説明します。

画像の最後に、

——『小説十八史略』第五巻「颯爽たり李隆基」より

とありますが、先ずこの二頁を転載した後、三ページ目から「背負って走れ」の記述に入っています。